

千歌「笛を吹いてました。先輩と同じように
……あ、うろ覚えですけど、たしか、こ
んな感じ……」

千歌（M）「私は足元の楽器ケースからフル
ートを取り出し、さわりの部分だけ奏でて
みる」

M フルート

演奏曲 A

さびの部分を演奏

千歌（M）「なぜだろう、吹いているうちに、
指先が勝手に、動いてゆく」

恵「ちよっと待って！」

千歌（M）「先生の顔色が変わった」

恵「まさか、とは思いますが……」

千歌（M）「私たち三人を、そのまま音楽室
へ連れていく」

恵「ごめんなさい。ずっと忘れていた。いえ、
忘れようとしていたんだと思う。あまりに

つらくて、背負えなくて……勇樹君のこ
とはすべて、心の奥へ、しまっていたから
……」

千歌（M）「先生が、固く閉ざされた棚を開
く。小さな箱を抜き、中からメモリーカー
ドを取り出す」

恵「勇樹君、将来は作曲にも挑戦したいって、
そう言っていて、『頭からずっと離れないメ
ロディがあるから』って……」

千歌（M）「ノートパソコンを立ち上げ、先
生がメモリーカードを挿入する」

恵「もっと早く、千歌さん、あなたに聴かせ
てあげるべきだった……」

M フルート

演奏曲 A

同様に、さびの部分演奏

千歌「……こんなことって……」

恭子「マジか。これって、さっきの……」

千歌（M）「私が夢の中で耳にした曲を、どうして、先輩が……」

M O U T

恵「あと、勇樹君、悪夢にうなされることがよくあるって。聞いてる？」

千歌「いえ、初耳です」

恵「川底に沈んでいく夢だって……」

恭子「人柱だ！ 前世の記憶ッ」

里美「（そ）ンなわけあるかッ。偶然偶然」

恭子「偶然にしては度が過ぎてるし」

千歌「……先生、人柱って本当にあったと思いますか？」

恵「『火のない所に煙は立たぬ』って言うじゃない。そういう言い伝えがあるなら、なにかは、あったんだと思う」

恭子「だよねえ。あったんだよ、きっと」

千歌「私……私、与三兵衛さんを助けなきゃ！ このままだと、人柱にされちゃう。

私の夢は、そこで終わってた」

里美「はい？」